

西川遊太郎 薬剤師

長崎大学

薬学部 薬学科卒

薬学部という学びの場は、単に薬剤師国家試験の合格を目指すための専門知識を得る場所ではなく、「社会に貢献する薬剤師」としての責任感や多角的な視野を養う場でもありました。

基礎薬学から臨床薬学に至る幅広い領域を段階的に学習でき、1～2年次には化学・生物・物理などの基礎科目に重点が置かれ、基礎ゆえの難解さに苦しむことも多かったです。3年次以降は薬理学や製剤学、薬物治療学など、より臨床に近い科目が増え、さらに覚えることが多くなりました。しかし、その過程を通じて、1～2年次での基礎科目の重要性やそれらと臨床との繋がりが深まりました。5年次には薬局・病院実習があり、座学での知識が患者さんの症状や生活背景に合わせて医療現場ではどう活かされているのかを実際に肌で感じることができる貴重な経験でした。6年次は、卒業研究と国家試験対策に大きな比重が置かれました。

まず卒業研究としては、「特発性肺線維症の遺伝子治療に向けての基礎的研究」を行ないました。具体的にはマウスにブレオマシンという抗がん剤を口から肺に直接投与(経肺投与)することで、人工的に肺を線維化させ、肺線維症モデルマウスを作成し、そのマウスに治療薬のキーとなる物質(ナノボール)を経投与して、線維化した肺と正常の肺での吸収効率の比較検討を行いました。また、マウスの適正な利用にあたっては、法令に求められている3Rsの原則【できる限り動物を供する方法に代わりえるものを模索すること(Replacement)、常に利用目的の把握と品質向上により供される動物の数を少なくすること(Reduction)、苦痛を伴う管理の排除や飼養方法の改善に努めること(Refinement)】を重んじ、常に感謝の念を持って接してきました。細胞実験から動物実験まで幅広く経験でき、卒業研究を通して課題解決力や論理的思考力、そして研究倫理を養うことができました。

国家試験対策としては、早期から過去問をコツコツ行なっていたこともあり、焦りはそれほどありませんでした。国家試験本番では、自己最高得点で合格でき、これまでの努力が実ってとても嬉しかったです。

また、学業以外にも部活(空手道部)やアルバイト(居酒屋等)での経験は、コミュニケーション能力の向上につながり、今後の社会人としての基盤作りの一助になりました。

卒業後は、岡山県の倉敷中央病院(以下、当院)の薬剤部で働いています。当院の薬剤部の特徴として、国内最大級の症例の幅広さ、総勢100名の薬剤師が活躍、また、充実した教育制度(師匠制度:新人薬剤師には先輩薬剤師が1年間マンツーマンで指導)があります。現在は、主に調剤室での内服や注射業務、また病棟研修などを通して薬剤師としての基礎固めを行なっています。日々新たな学びを得られてとても充実しています。そのほか、当院の薬剤部では、フォーミュラリ(有効性、安全性、かつ経済性に基づいた医薬品の使用方針)に力を入れています。というのも、国民医療費は約48兆円(令和5年度の実績見込み)と年々増加しており、社会保障制度の持続可能性を脅かしています。そこで、医薬品の経済性も評価することが求められています。上席の先生のサポートをいただきながら、新人としてできること(資料作り等)から少しずつ関わらせ

てもらっています。そのこともあり、医薬品の経済性の観点にも興味湧き、将来は医薬品の費用対効果の評価に関わる薬剤師を目指したいと思います。薬剤師としての道のりはまだ始まったばかりで、これからどんな未来が待っているのかワクワクとドキドキが入り混じっている状態ですが、「社会に貢献する薬剤師」というブレない軸を持って薬剤師人生を歩んでいこうと思います。